

公益財団法人こころのバリアフリー研究会

Newsletter

No.8

2020.1.6

会員みなさまへ

(財)こころのバリアフリー研究会 理事長

秋山 剛



今回、こころのバリアフリー研究会に新しく入会いただいた5名の方を、このニュースレターで紹介させていただきます。ピアサポート専門員、デイケアでの経験を踏まえた市のセンターでの活動、社会福祉法人でのリカバリーカレッジ、心のクリニックでのひきこもり支援の活動、精神科救急・依存症・司法関連の臨床でのアンチスティグマの視点など、きっとみなさんが触発される内容だと思います。こころのバリアは、いろいろな場面や状況で生じます。こころのバリアフリー研究会で、いろいろな活動をしている方と、是非、緊密なネットワークを作っていただければと思います。会員同士、連絡を取られたいことがあれば、事務局までお知らせください。相手の方のご了解を確認した上で、連絡先をお知らせいたします。

目次 1頁 理事長からの挨拶

2~4頁 新会員の紹介

花山千枝（仙台市役所 ピアサポート専門員 WRAP ファシリテーター）

田原智昭（横浜市総合保健医療センター地域精神保健部）

植田太郎（社会福祉法人巣立ち会）

河合 純（ながおか心のクリニック 精神保健部）

入來晃久（地方独立行政法人 大阪府立病院機構大阪精神医療センター）

花山千枝

(仙台市役所 ピアサポート専門員 WRAP ファシリテーター)

みなさまこんにちは。この度はこころのバリアフリー研究会の一員として、私を迎え入れくださりましてありがとうございます。

私は宮城県の公的機関に勤務し、精神科病院に入院している方が地域で暮らすことのお手伝いをしています。「一人の生きづらさを抱えた人」として仕事を持ち、関わる方へ自らの経験を差し出し、「誰もがリカバリーしていくこと」を共に学び続けています。

プライベートでは仙台スピーカーズビューローに所属し、自助活動、WRAP、IPSを学びながら、天気良ければ林道でバイクに乗ることもあります。

福島県の南相馬市で生まれ、国学院大学で哲学を嗜みました。地方で育ち、都会での経験が統合され、現在の仕事につながっていると考えています。

言葉がこころのバリアフリーに深く関わっていることを大いに感じますし、様々な教育や文化の中でスティグマ・アンチスティグマも生まれると思っています。

そういった世界の中の令和の時代に、ひとりひとりそれぞれのこころがバリアフリーとなることを願っています。最後までお読みくださり、ありがとうございました。



田原智昭

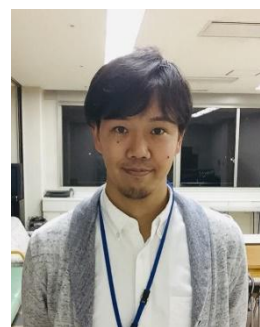
(横浜市総合保健医療センター地域精神保健部)

こころのバリアフリー研究会 会員の皆様

この度、皆様のお仲間に加えていただくこととなりました。どうぞ宜しくお願いします。

入職以来、精神科デイケア一筋でやってきまして、外来治療の一部＝医療であることの利を最大限活かすデイケアの形を模索してきました。その過程の中で、医療を越えた活動やシステムの必要性を感じる事が多々あり、その1つが、アンチスティグマの活動でした

1人1人のリカバリーを応援すればする程に、スティグマという障壁がリカバリーを阻害しており、このスティグマは社会やコミュニティから向けられていると同時に、利用者自身や私たち応援する立場の者から向けられているものも多大であり、忸怩たる思いに至る事も多々ありました。この春から就労支援にフィールドが移りましたが、これまで同様に



活動の重要性を感じております。

これまで、私が職場の業務の一環や、個人的に行ってきた活動は、地域住民向け講演会やワークショップ、子育て支援施設での子育て世代向け講座、高校生や大学生向けのワークショップ、公立学校の管理者向けの研修会などです。

今後、会員の皆様の活動に触れさせて頂きながら、更に自分の活動を充実させていきたいと思っております。宜しくお願いたします。

植田太郎

(社会福祉法人巣立ち会)

社会福祉法人巣立ち会の植田と申します。5年前、まったくの異業種から転職して、長期入院者の退院促進を長年行っている巣立ち会で働きはじめました。

現在は、相談支援事業所「野の花」で東京都の精神障害者地域移行促進事業を担当しながら、支援する側・される側という関係を越えたサービスのあり方を模索するリカバリーカレッジという取り組みに、運営委員として関わっています。



退院支援や、病院を出て地域で暮らす方々の支援をする中で、充実した人生を生きる上で障害となるスティグマに直面することが多々あります。仕事に慣れた専門職の「内なるスティグマ」を感じることも多く、私自身も無自覚のうちに非対称な構造の中で思考停止してしまわないよう、学び続ける必要を感じています。

こころのバリアフリー研究会を通して、さまざまな領域でご活躍される先輩方からたくさんのお話を学ばせていただければ幸いです。どうぞよろしくお願申し上げます。

河合 純

(ながおか心のクリニック 精神保健部)

はじめまして。今年から本研究会に入会させていただきました、ながおか心のクリニックで精神保健福祉士として勤務しております河合純と申します。推薦して下さった、前理事長の佐藤光源先生、理事長の秋山剛先生方に感謝いたします。

新元号「令和」が発表された3日前の3月29日、「中高年のひきこもり」に関する初め

での調査結果が内閣府から公表されました。ひきこもりの高齢化に関する実態調査で、40～64歳までのひきこもりの推計数が約61万人となり、ひきこもる中高年と高齢の親が孤立する「8050問題」が特殊な例ではないことが示されました。私は現在、ひきこもり外来を受診した若者を中心に、「成人発達障害専門プログラム」を担当しています。また、10月26日に実施された、成人発達障害支援学会「発達障害とひきこもり」シンポジウムでは、当院の実践と研究成果を発表させていただきました。今後のひきこもり支援について、彼らの「いいところ」を探し、生活しやすい環境を整える心理社会的支援が必要になってくると感じています。発達障害とひきこもりについて、今後も会員の皆様のお役に立てるような研究成果を発表していきたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

入来晃久

(地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪精神医療センター)

私は非行や犯罪の心理学を勉強した後、現在は精神医として働いております。

精神科救急や依存症、司法関連の臨床をしていく中で出会った仲間や、秋山先生にもお誘いいただき、入会させていただきました。

精神疾患へのスティグマや、本人のセルフスティグマによって、本来必要であり可能なはずの支援や回復のためのアプローチが実施できないこともあり、精神疾患を持つ人の可能性を奪ってしまうことについて問題意識を持っております。

個人的な経験になりますが、オリンピックなどでも行われている講道館柔道、高専柔道の流れを汲む七帝柔道、日本からブラジルに渡り発展したブラジリアン柔術を経験し、それぞれが独自にやっていて、外部の介入をシャットアウトしている印象も強かったです。

似て非なるものへの抵抗感というのは、明らかに異なる集団に対してよりも強いものでありました。

しかしながら似て非なるものの交流は思わぬ発見も多く、実は成長にも繋がるチャンスでもあります。

言うは易く行うは難しですが、自分達の一員として一緒にやっていくという姿勢で、どちらかが歩み寄るような受け入れではなく、相互理解、相互交流を実践できればと思いながら、アンチスティグマ委員会で今後の方策を検討し、実践していくことで、困っている方によりよい社会になる一助になればと考えています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

